

里山活動によるちばの森づくり

森の不思議を探る拠点づくり



平成 19 年 2 月

はじめに

森には多様な生物が深くかかわりあって暮らしているのです。その生態や自然環境に、思いもよらない仕組みや不思議が潜み、驚くことがあります。また、人の暮らしや歴史が、森に刻み込まれていることにも気づかされます。

里山活動を一層充実させるには、森に見られる「循環する自然」や「共生する自然」を知りその仕組みを理解し、それらを暮らしに活かすことが求められています。私たちは、森の不思議を楽しく体感することが、そのための第一歩と考えました。また、意識して不思議を体感するためには、隠れた自然の特徴が浮かび上がるような、拠点づくりが必要です。

拠点には自然の恵みを体感し、ゆっくりと観察するための施設づくりも必要だろうと考えました。このような拠点づくりと拠点での自然体感、不思議を探ろうとする知識や観察力を高め、森林の持つ癒し効果を高めることにもつながります。

千葉県では、平成15年に「千葉県里山の保全、整備および活用の促進に関する条例」を制定するなど里山活動を支援する施策を展開してきました。また、平成16年から里山活動の技術的支援を目的にみどり推進課、森林研究センター、社団法人千葉県緑化推進委員会、ちば里山センターなどが「里山活動によるちばの森づくり」をテーマに公開講座の開催を始めました。

このガイドブックは、平成18年度に行われた公開講座「森の不思議を探る拠点づくり」をまとめたものです。人と森との新たな関わりをめざす「ちばの森づくり」のためにご活用いただければ幸いです。

目次

1	森の不思議を探る拠点づくり	1
1. 1	植物や植生を観察する森づくり	3
1. 2	昆虫を呼ぶための森づくり	4
1. 3	土壌動物観察のための森づくり	5
1. 4	野鳥観察のための森づくり	6
1. 5	野生動物が好む森	7
2	拠点を中心とした里山の整備事例	8
2. 1	樹上の拠点とお花見の道を中心とした森づくり	8
2. 2	崖の上の拠点と里山の変貌を探る森づくり	10
2. 3	谷津を望む拠点と野原の自然を探る森づくり	12
2. 4	水場観察の拠点と南房の四季を探る森づくり	
	—和田きすなの森—	14
2. 5	白鳥の見える遊歩道を拠点とした森づくり	
	—東庄県民の森—	16

1 森の不思議を探る拠点づくり

森の不思議を探るためには、ゆっくりと森を観察するための拠点が重要です。また、そこに自然を観察するための知識が加われば、これまで見えてこなかった不思議が見えてきます。そこで今回は、森の不思議を探るための拠点づくりと、観察に必要な知識について考えてみます。

拠点とは？

拠点とは、そこにとどまって数時間、一日、一年、二年・・・、長期に森の自然を観察し、その恵みを体感する場所です。目で見ただけでなく、耳で聞き、匂いを味わい、肌で風を感じ、体全体で森とその自然を味わうための場所と言えます。里山に拠点を造ることにより、自然への理解と知識が深まり、さらには森林の持つ癒し効果を体感できるかもしれません。

拠点到した場所は、観察のために多様な自然を望める良好な展望が確保できることです。滞在することを考えればできるだけ快適な空間が欲しいものです。明るい雑木林で南向きの尾根や展望が開けた崖の上、近場に谷や湧き水のあるところがあれば最高です。また、拠点につながる歩道にそって豊かな自然や変化に富んだ自然が観察できれば申し分ありません。

ちばの森でも、鳥や昆虫の飛来に感じる日変化、雑木林の新緑や紅葉などの季節変化が観察できるでしょう。また、サクラの開花日の変化や樹木の成長、植生の遷移などの長い年月をかけて観察できるものもあります。

拠点の森づくりの進め方

拠点の森づくりでは、周辺の各ポイントや場所の利用目的を定め、それにふさわしい目標とする森の姿、目標林型を定めることから始めます。利用目的としては、景観や自然の変化を楽しむ森、森に刻まれた歴史を観察する森、森を体感することにより心を癒す森、生物の多様性を観察する森などが考えられます。

また、この森づくりでは観察のために多様な自然を配置することと、その自然を観察するための整備が必要です。たとえば、多様な自然の配置では、放置されてきた雑木林の一部を伐採し、あるいは林床を刈り取るなどの手入れを行い、新たな植生の成立を図ります（生物多様性保全のための整備のポイント参照）。また、带状に下刈りを行い、解放空間の確保や、あるいはその逆に野生鳥獣が生息しやすくなるようヤブを適度に配置します。加えて、観察するための整備では林縁部を伐採して見通しを良くし、観察者の目線に配慮します。

なお、整備方法については「里山活動によるちばの森づくり」(平成16年度版)を参照してください。



日没時に谷津の自然を観察する

生物多様性保全のための整備のポイント

植物・植生

- 常緑樹を除くと、多様な種類組成のみられる広葉樹林に置き換わる。
- 高木層の整理伐やササ・低木の刈り払い、林床を明るくするため、林縁や草原などの群落の構成種が侵入しやすくなる。

昆虫・土壌動物

- 多様な植物、多様な植生を成立させると、それらを餌とする多種の昆虫が集まってくる。
- 枝・葉を集積すると、それらを分解する多種の土壌動物が増える。

野生鳥獣

- 繁殖場所や通路となるヤブを配置すると、野生鳥獣にとって住みやすい森となる。
- 水場を作ると水浴びのために野鳥が集まる。

拠点の施設

拠点では安全性、快適性、そして森の不思議を観察するための施設を計画します。安全性は、子供や高齢者が利用することを考え、利用者に応じてどんな危険があるかを予測し、フェンスや手すり、注意看板等を設置します。拠点に至る遊歩道においても、同様な配慮が必要となります。快適性は、拠点に長時間とどまることを想定し、ベンチやテーブルなどを設置します。また、観察のための施設としては、季節の変化や樹木の変化を観察できる展望を確保したテラスや、鳥類を呼びのための水場、水場に来た鳥を観察するためのブラインドなどを設置します（図 1.1）。

施設づくりの材料には森づくりで発生する丸太やタケ、ササなどの利用が望まれます。丸太が大量に発生する場合には、大型のテラスやツリーハウスを造るのも良いでしょう。（丸太などの施設は、野外ではやがて腐朽し壊れます。安全点検と手入れで長持ちさせてください。）



観察用のウッドテラス

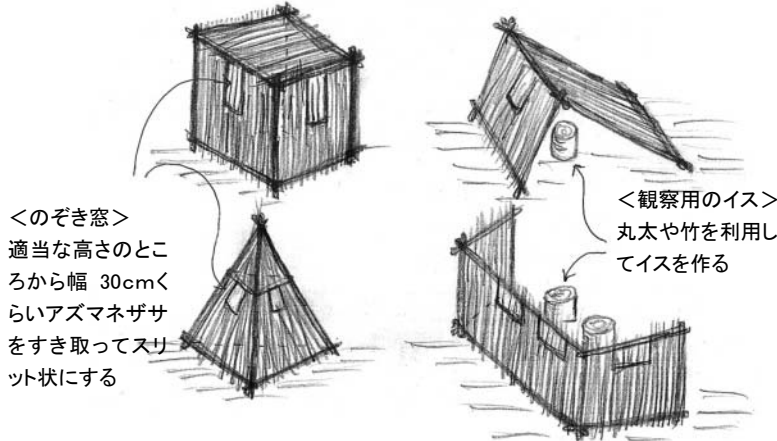


図 1.1 間伐材とアズマネザサで作製する野鳥観察用ブラインド
(作図 富谷健三氏)

ブラインドづくり

里山活動の注意

放置された里山林では木の枝に宙づりになった大きな枯れ枝をよく見かけます。風のある日には注意が必要です。また、スズメバチが飛び回っていませんか？ 里山にはマムシがいることもあります。秋の日だまりや夏の湿地には特に注意。日頃から対策を考えましょう。



コガタスズメバチ



スズメバチの巣



枯れ葉の中で目立たないマムシ

1.1 植物や植生を観察する森づくり

里山では雑木林も人工林も放置が進み、多くの林ではアズマネザサが繁茂し、シイ、カシなどの常緑広葉樹も旺盛に生育するなど、特徴的な植物の種類も量も貧弱になっています。そこで、明るく管理された林や、暗く放置された林など様々な状態に整備することで、地域を特徴づける植物や植生の不思議、植物の生育や開花時期、植生の成立や発達（遷移）などが観察できます。

いろいろな森と植物

里山の原風景としての雑木林

雑木林では季節を観察・体感することをお薦めします。春になると裸の林にコブシの白い花が咲き、やがてヤマザクラが咲き始めます。桜は農事歴、日本の山桜に息づく、開花から一年の吉兆を予兆するという桜信仰を感じてみるにはいかがですか。里桜（園芸種）の染井吉野、枝垂れ桜の咲く姿を浮かべながら、端正な美しさのある山桜を意識して観察してみましょう。

雑木林の木々は新葉、紅葉、落葉と季節の彩りも楽しませてくれますし、生育するガマズミ、ムラサキシキブ、シラヤマギクなどと里山の管理の下刈りとの関係も観察できるでしょう。



ちばの里山によく見られるヤマザクラ

活用が期待される人工林と竹林

スギに絡み付く見事なフジ花、里山の荒廃を物語っています。また、竹林の拡大が何処でも観察されています。その昔、千葉の山自慢でもあったサンプスギ、挿し木で育った樹形が皆同じ、整然とした姿は見事なものでした。

現在は木材や竹材の活用が滞り、人工林や竹林が放置されることで、災害発生が危惧されるなど問題となっています。暮らしに地域の資源の活用を考えたいものです。



手入れが滞りフジがスギに絡み付く（冬の景観）

激減したマツ林

里山ではマツの朽ちた倒木が良く見かけられます。20 数年前には内陸部のどこにでもあったマツ林は、松くい虫被害でほとんどが枯れ、今はごく一部に残っているのみです。また、海岸部のマツ林も、病害や過湿害により衰退の傾向がみられ、加えて、地球温暖化による海水面の上昇の悪影響が危惧されています。マツ林の景観や暮らしとの関わりを忘れたくないものです。

その他

伐採地ではダンドボロギク、ベニバナボロギクなどの普段見かけない群落が成立し、やがてススキ草原、常緑広葉樹林へと遷移が進みます。

また、鳥が集まる水場では、鳥による種子散布（被食散布や付着散布）による植物の侵入が始まります。種の分布拡大や生物多様性の変化の不思議がみられます。



ベニバナボロギク（中央）
ダンドボロギク（周囲）